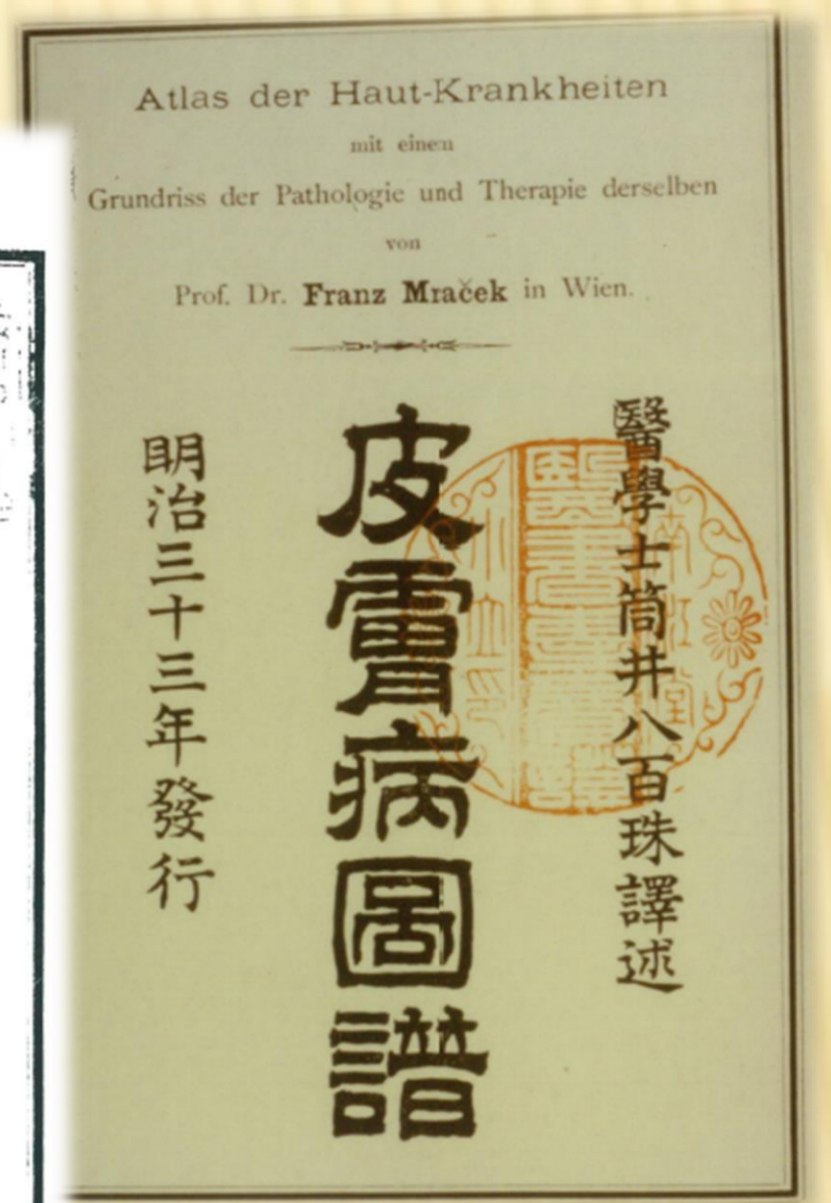
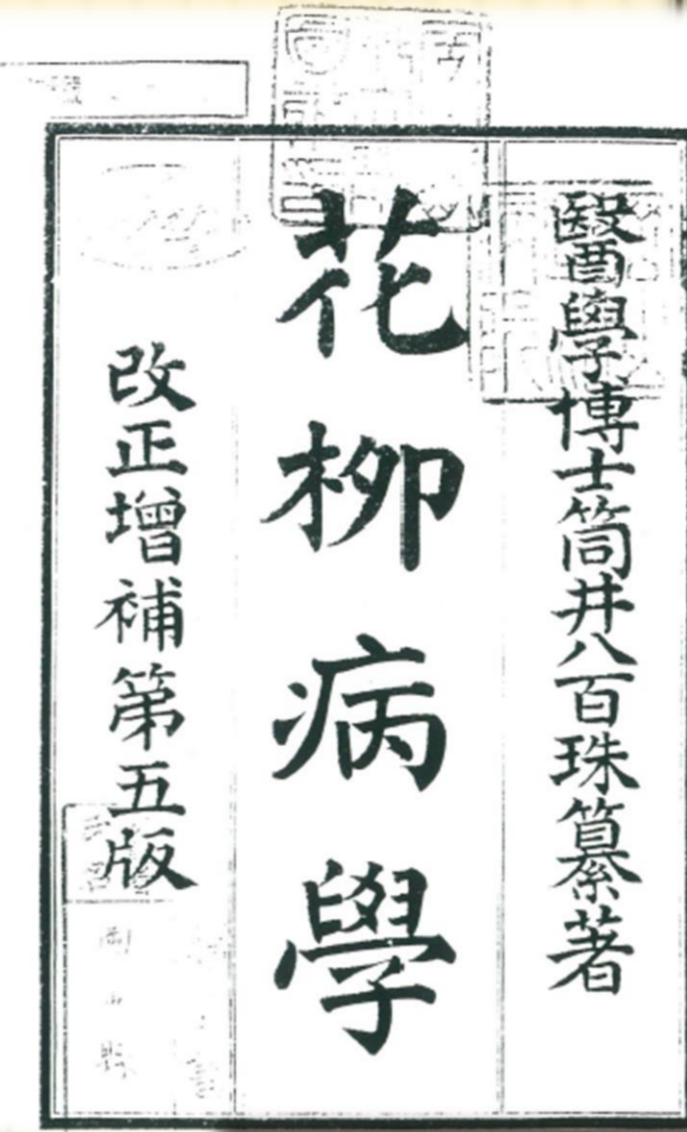
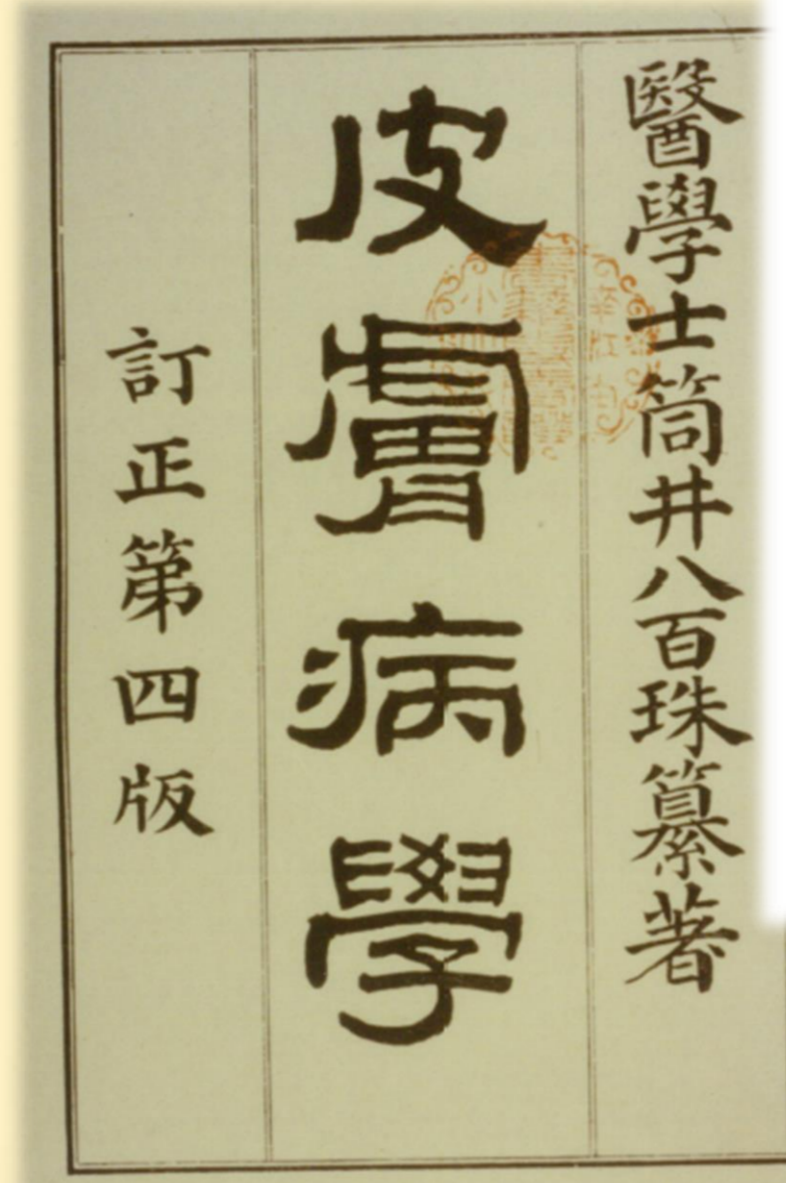


初代教授

つ つ い や お じ ゅ

筒井 八百珠 教授

大正2年(1913)―大正10年(1921)



1863年（文久3年）和歌山県新宮に生まれ、代々新宮藩の剣道師範をつとめていた。各県が競って医学校を設けていた時代であり、1877年（明治10年）に三重県医学校に入学。しかし2年後に県命によって東大に進み、予備門を経て1889年（明治22年）に医学部を卒業した。卒業後はスクリバ教授について外科学を学んでおり、当時の外科は皮膚科や泌尿器科はもちろん、耳鼻咽喉科や歯科までも含まれていた。翌年9月、千葉の第一高等中学校医学部（現在の千葉大学医学部）教授、ならびに千葉県病院副医長（のちに医長）に就任し、外科学、皮膚病学、花柳病学を担当した。

この年すでにドイツ語の医書『Vienna clinic』を翻訳した『臨床医典』を出版している。当時は医学の黎明期で、現在では考えられないことであるが、在学中から西洋医学書を翻訳して出版する物も稀ではなかった。東大の予備門ではドイツ語を徹底的にきたえられ、ドイツ人教師によるドイツ語の授業もあり、学生のドイツ語のレベルが非常に高かったのである。

臨床医典の外にも1896年『皮膚病学』（1917年に第六版）、1897年『花柳病学』（1908年に第十版）、1900年『皮膚病図譜』、1904年『新選外科手術』、1908年に『花柳病講話』と次つぎに精力的に出版しており、また数多くの先駆的な論文を発表している。

この間1899年より2年間、文部省留学生としてドイツに留学して、ブレスラウ大学（現ポーランド領）で有名なミクリッツ、ナイセルの指導を受けた。帰国後の1908年に医学博士の学位を授与されており、また東宮殿下（大正天皇）の千葉医専への行啓にさいしては、「化学療法剤サルバルサンについて」と題して御前講義の栄に浴している。

岡山医専の校長は、岡山県医学校時代から33年間も菅之芳がつとめていた。しかし日本住血吸虫を発見して学士院賞を受賞した病理学の桂田富士郎教授と衝突し、校長の文部省への上申によって桂田は休職となった。これに抗議して学生はストライキに突入し、その後も学内は騒然とした状態がつづいていたため、責任をとって校長が退陣することになった。日本中に有名となった岡山医専ストライキである。岡山医専のストライキの解決は、学校、地元岡山はもちろんのこと、文部省にとっても重要課題となっていた。後任に指名されたのが筒井である。

1913年（大正2年）、当時の千葉医学専門学校有力教授であった筒井八百珠、文部省より要請があり、中四国における唯一の医育機関であった岡山医学専門学校の校長ならびに岡山県病院の院長に就任した。岡山大学医学部皮膚科学教室の歴史は筒井が皮膚病花柳病科教室を創立したことに始まる。また学生対策だけではなく、教授間の相互の融和のためにも、校長、院長として同心平和の精神が基本理念であった。こうして全国に有名となっていた学園紛争を解決し、危機的状況にあった本学の正常化に成功した。内山下から移った新校舎と病院が完成に近づいた1921年（大正10年）1月28日、昇格を目前にして食道癌のために57歳で死去した。筒井の在任は七年半に過ぎなかったが、本学の改革と待望の大学昇格に大きな役割を果たした名校長であった。

医師を育てる教育者としての信条は《職業に貴賤はない。ただし、医師は尊い人命をあずかる崇高な職業であることを忘れてはならない》《よき人間のみが、よき医師たり得る》であった。

筒井は本学の歴史をかざる校長であり、その名を銘記すべき功労者である。学生時代から早くも医書の翻訳を始めており、生涯にわたって情熱を注いだ名著『臨床医典』が信じられないほど長い命脈を保っている。医専校長として、教授として、著者として、岡山と千葉だけでなく、筒井八百珠は長く医界に貢献した。

岡山医学同窓会報 77号 平成6年10月1日 掲載 筒井八百珠（やおじゅ）校長と『臨床医典』 より抜粋・改変